もう一つの実践・国際交流

# (1) 第8回海外研修（ドイツ）報告

# (2) 特別企画研修（アメリカ）報告

全個連会報
特別号

発行
平成10年
10月24日

発行責任者
染田屋謙相

## (1) ドイツ研修旅行

### *ドイツの教育の特色に学ぶ*

東京都大田区立馬込第三小学校長　中澤　米子

明治時代にわが国は、教育制度を整える時、プロイセン憲法下の教育政策観を見習った。勅令として公布された「小学校令」の母法は、ドイツ・マイニンゲン公国の国民学校法によっているといわれている。この「小学校令」は、その後の「国民学校令」までの、約５０年間の制度だけに、わが国の小学校の基本骨格を形づくったものである。日本の教育の原型が、ドイツにあると言われる所以である。

今回の研修の目的の一つは、「日本の教育の源」でもあるドイツの教育の現在の実態を視察すること、二つ目は、東西ドイツ統一後の課題である、異なるイデオロギーとシステムの下で生きてきた人々の精神的・文化的な一体化を、教育の中でどのように実現しているのか、その一端を垣間見ることであった。

残念ながら、二つ目の目的は、研修期間が短く十分な視察ができなっかった。特に、今回、旧東側の地域の学校を一つも見学することができなかった。このことは次回の研修に委ねたい。

さて、研修前に私たちは、ドイツの教育に対し、やや固いイメージをもっていた。けれども私たちの予想に反して、教育政策も含めたドイツの教育風土が、実に自由で、柔らかな雰囲気にあるのには驚かされた。

「夏休みはいつから、いつまででしょう」という私たちの質問に、「さあ、毎年違います」という。どうしてかというと、各地区ごとに、夏のバカンスが混み合わないように調整して、夏休みの期間を決めるのだそうだ。「夏休みの日程が毎年違って不都合」などといい意見は全く聞かれなかった。何事もきちんと決めておく、日本の教育の発想とおよそ隔たりがある。

小・中高の、どの学校のどのクラスも、２０人程度の生徒数で学習内容も日本と比較し、ゆったりと編成されていた。例えば、６年の算数「比」は中学生の学習内容であり、４年の理科「乾電池の直列・並列つなぎ」といった学習は、なんと高校生の学習である。日本の子どもたちが、教科に示される「系統」に従って、たくさんの内容を、すごく急いで学習していることを改めて考えさせられた。

ドイツの教育のもう一つの特徴は、後述の谷口氏の論文にあるように、三分岐型の教育システムである。これは、いわばヨーロッパの階級制度を反映した教育システムである。いわゆる知識人と民衆が「基幹学校」、「実科学校」と「高校」とに分けられ学ぶ学校制度である。

このことが、差別ということで、１９６０年代の教育改革で、「総合学校」が誕生するが、「総合学校」は、そう普及したわけではなく、ドイツは、今もって三分岐型が主流である。これは、「他人は他人、自分は自分」という強い価値観と個人主義が根底にあるからである。ドイツの教育が不必要な競争を生まず、のんびりと構えているのは、ここにその源があるようである。

# ドイツの教育（制度とカリュキュラム）

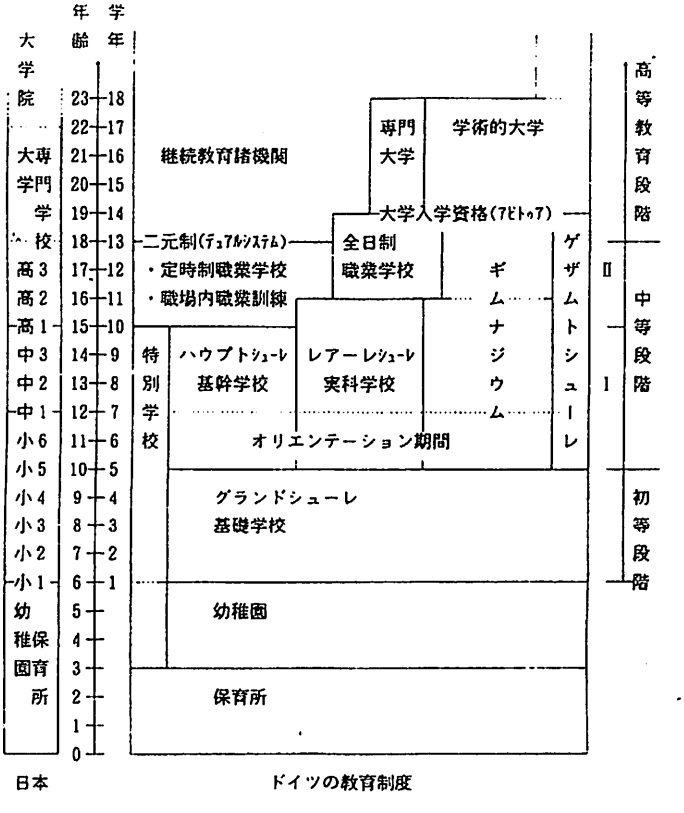
神戸市立樫野台小学校　　谷口　育史

現在、ドイツの教育制度は、旧西ドイツ時代の「学校制度の領域における統一化のための１９５５年の州間協約（デュセルドルフ協定）」を改訂した、ハンブルグ協定(1964)が基本的枠組みとなっている。

その制度が、旧東ドイツ域を含んだ全国で実施されている。各州がそれぞれの教育施策を立案・実施し、各州間文部大臣会議（全国16州・市）において調整を図るという体制となっている。

ドイツの教育制度は、複線型のため、単線型の制度に慣れた我々日本人の目には複雑な形態と写る。分かりやすくするため図を作成した。以下、図をもとに概説する。図は簡略化してある。実際は、もっと複雑な形態である。

ドイツの教育制度




## 1）就学前教育（0～5歳）

保育所Kinderkrippe（３歳児まで）、幼稚園Kindergarten（３～５歳児）、予備学年Vorklasse(就学年齢に達していないが就学が適切とされる者を対象にした早期教育施設)、学校幼稚園Schukindergarten（就学年齢に達しているが就学が不適切とされる者を対象にした施設）などがある。

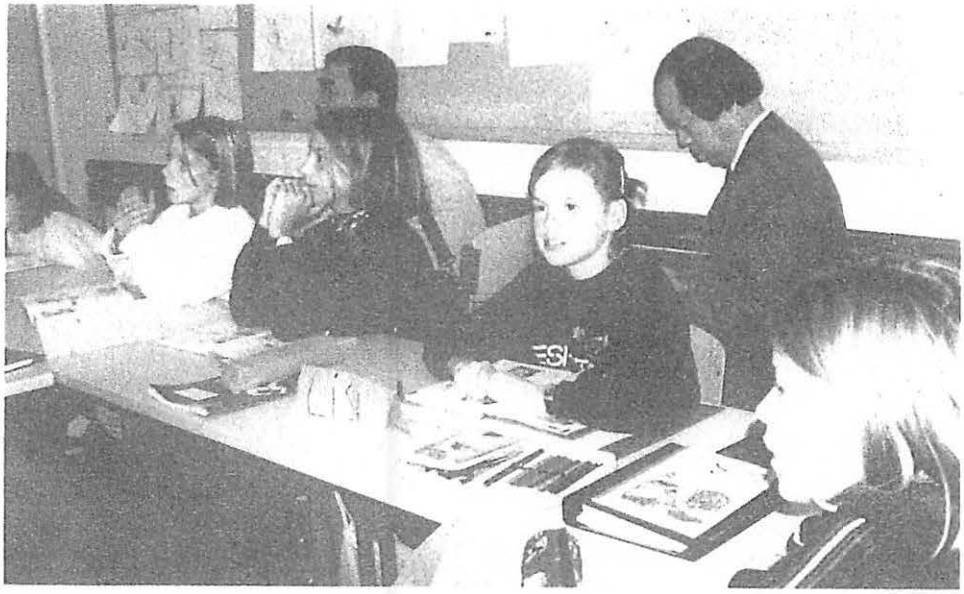
## 2）初等教育（6～9歳）

初等教育は、国民すべてにたいして共通な教育がなされる。この初等教育は基礎学校Grundschule で行われ、教科（国語、数学、体育、宗教など）のほかに事実教授Sachunterricht（理科、社会、交通安全、性教育など統合教科）がある。見学したティルユンゲンスピーゲルシューレは、児童２５０人、教師は校長を含め１１人（すべて女性）の学校である。

校長も学級を持ち１１クラスに平均２３人程度の児童で組織されている。学級は、隣接学年や異学年を組み合わせた形態を取っている。加配もなく、教室以外の特別教室はない。この初等教育段階では実験や技能をともなう科学教育や芸能教育はほとんどない。

いわゆる、３アールズを主としたカリュキュラム構成となっている。また、日本の学校行事のようなものはなく比較的ゆったりとしたカリキュラム構成となっている。子どもの一日は、学校（授業）は午前中で終え、午後は、習い事をする事が多い。日本の学習塾のようなものはない。教師の午後は、教材開発や会議にあてられるが週当たりの授業時数(28時間)、総労働時間（30時間）が決まっているが、打ち合わせなどを休日にとってもよいことになっている。

単線型の日本の教育制度に較べ
ドイツの教育制度は複線型である



## 3）中等教育（11～19歳）

前期中等教育では、個の能力・適正に応じて基幹学校・実科学校・ギムナジウムに分かれる。最初の２カ年はオリエンテーション期間として学校間の移動も認められる。この３校の性格を併せ持つ総合制学校もある。

それぞれの就学比率は、ノルトラインウエストファーレン州では、基幹学校25%、実科学校35%、ギムナジウム30%、ゲザムトシューレ５%、その他（私立学校等）５%であるが、州によってかなりの差がある。

### 1　基幹学校ハウプトシューレHauptschule（10～14歳）

卒業後就職して職業訓練を受ける者が主として就学する。見学したマックスタンシューレは、基礎学校と基幹学校を合わせた学校で日本での小学校１年生から中学校３年生までが一つの学校で学んでいた。

この地域は、住民の４０%が何らかの社会福祉の援助をうけている貧しい地域である。１５パーセントが外国系住民で２０ヶ国から来ておりドイツ語のできない者がかなりいる。ここでは、基礎学校から基幹学校へそのまま進学する児童が多く、他の実科学校やギムナジウムに進学・転学する子は、少ないとのことであった。

保護者や本人が３系統の中等教育を選択するときに社会環境によって進路が影響されることが少なからずあると感じた。

### 2　実科学校レアール・シューレRealschule（10～15歳）

卒業後専門上級学校に進学し中級の職域につく者が主として進学する。実科学校は、基幹学校を上回る継続的な一般教育を行う６年制の学校である。基幹学校にはない、語学教育や科学教育の内容もカリキュラムに入ってくる。

中堅的職業者の養成という主たる目的から実学的教科に重点がおかれているものの、かなりの水準の一般教育も行われており、外国語と数学的・自然科学的学習内容は、基幹学校との差異を明確にしている。

### 3ギムナジウムGymnasium（10～18歳）

大学進学希望者が主として進学する。英語ではGrammar Schoolと訳されるように名前の由来は、古代ギリシアのギムナシオンに由来し、中等学校としてのギムナジウムの前身は古典語学校になる。現在では、一般大学入学資格（アビトゥーア）を与えるすべての中等学校がギムナジウムとよばれ、人文主義ギムナジウム以外の中等学校もギムナジウムと呼称されるようになった。

その発展経過から1960年代までのギムナジウムは人文主義ギムナジウム、近代語ギムナジウム及び数学・自然科学ギムナジウム等の類型に分かれ、特に、11～13学年にあたる中等教育第二段階においてその学校ごとの特色が顕著に現れていた。しかし、1970年代後半よりすべてのギムナジウム上級学校が共通の教育課程を持つことになり、統一化されつつある現状にある。

4　総合制学校ゲザムトシューレGesamtschule
（英）Comprehensive School

近代のヨーロッパは、労働大衆の初等教育と中・上流階層の中等学校は別系統の学校として発達していた。教育の機会均等の理念からすべての国民が袋小路なく高等教育へ進学できる道を開く単線型学校制度形成の動きは、19世紀後半から20世紀初等にかけてみられる。いわゆる、統一学校運動である。この運動が第一次世界大戦後の基礎学校設置、第二次世界大戦後のゲザムトシューレ設置運動につながっている。しかし、この総合制学校は設置に積極的な州とそうでない州があり、中等教育諸学校の中では、比率も低く広がりをみせていない。

5　職業訓練と職業教育学校制度
（15～19歳）

基幹学校及び実科学校の卒業者のための職業教育・訓練の一般的な形態は、企業と訓練契約を結び見習いとして訓練をうけながら週に１～２日、12時間程度、職業学校Berufsschuleに通うというものであり、この二元制の形態はデュアル・システムDualessystemと呼ばれている。職業学校に通うことは義務となっていて、国民の義務教育年限は18歳までとなっている。

職業訓練の一部を全日制の形態で済ませるものとして１年制の職業基礎教育年も設けられている。職業専門学校は全日制で最低１年、最高３年の学校であり、商業、工業、家政、社会福祉などの分野の学校がある。専門上級学校は全日２年制の学校である。修了すると専門大学入学資格を得ることができる。

専門ギムナジウムは技術、農業、家政などの分野の職業教育を行う３年制のギムナジウムであり修了者には大学入学資格が与えられる。そのほかにも様々な職業教育学校がある。

## 4）高等教育

高等教育機関は、学位の授与権と大学教授資格の授与権を有する学術系大学の大学Wissenschaftliche Hochschule（総合大学、工業大学、総合制大学、教育大学、神学大学など）、芸術大学（美術大学、音楽大学）、専門大学の３グループがある。

## 5）教員養成制度

教員養成は、総合大学及び教員養成大学で行われている。基礎学校・基幹学校・実科学校教員は３年で、ギムナジウム教員は４年でその資格が取れる。第一次国家試験合格者の中から試補教員の採用が行われ、１年半～２年、指導教員の助言のもと勤務校で実習を行いながら研修施設で研修を受ける。そして、第二次国家試験に合格した者の中から正規の教員の採用が行われる。

## 6）日本との比較

日本では、単線型の教育制度の中で、高校が準義務教育機関化している。学校間格差が学力に応じた形となっているともいえるが、教育内容は、全日制高校では大学受験のため画一化している。

また、実業高校においても学校間格差のランク付けの中にあり、本当にその系統の職業をめざしている者が学んでいるとはいいがたい現状がある。

国民がすべて同じ内容の教育を受ける機会すなわち、教育の機会均等が保証されている形ではあるが、これでは、本当に個々に応じた教育を受けているとはいいがたい。むしろ現状は、個々の能力に応じていない点で教育差別を内包している教育制度となっている。

ドイツの学校制度は、複雑であり、前述のように社会階層間差別、途中での進路変更の困難さ等の複線型の問題を抱えている。確かに、見学先の低所得者層の多い地域の学校では、進学先が基礎学校に接続したハウプトシューレに進学するのがあたりまえといった雰囲気を感じた。

しかし、制度を概観するかぎり、最近の制度は、進路の袋小路をさける進路変更の柔軟さもみられる。むしろ、自分の人生を早くから自分で考え決定していくのには有利な制度ともいえる。「はじめに個ありき」というお国柄、国民性というものを感じた。

また、職業訓練を受けながら、その職業に関係した教育を受けること、受けさせることを義務付けられていることは、国民の教育を狭く教育関係者だけに求めがちな日本に比べて広く国民全体が係わっているという点ですぐれていると感じた。

# ドイツの学校

## ティルユンゲンスピーゲル小学校

８月２４日、今回の海外研修の最初に訪問したのが、ボン市郊外のこの学校である。すでに２週間前から新学期が始まっていた。

４５年程前の創立で、３階建ての直方体の校舎に管理棟がついているという建物であり、小さな体育館と前庭、そしてちょっとした広場程度のグランドが敷地内にあるというこじんまりした小学校であった。

児童数は１年～４年まで約２５０名。このうち１０名は障害児である。（障害児学級は無く普通学級で学習するが障害の程度によってはインターン等が子どもに付き添っている場面がみられた。）

１１クラスの編制で、教員は校長を含めても１１名。従って校長とも２年と３年の混合クラスの担任で、午後は事務を執るということであった。教員はすべて女性である。

いくつかの学習場面を見せてもらったが、一斉的な指導は少なく、個別の対応が多く見かけられた。というのもこの学校は異学年の混合クラスがあるからであろう。クラス編制については、親と教師と校長とが話し合って決めるとのことである。

授業は午前中に行われる。とは言っても午前８時から始まり、下校は午後１時頃となるので日本と同じように５時間～６時間の授業は行われわれていることになる。

教科は日本と大差ないように思ったが、この学校の場合は１年生から簡単なフランス語を校長自ら教えているということであった。州としてのカリキュラムはあるものの、学校独自の取り組みができるような弾力的なものであるらしい。

また、「夏」や「歯」をテーマにして、４週間程度のプロジェクト的な学習も行うという話であった。外国にはめずらしく上履きに履き替えて学習をしていた。

（神奈川・河合剛英）

## アウクストマッケ中学校

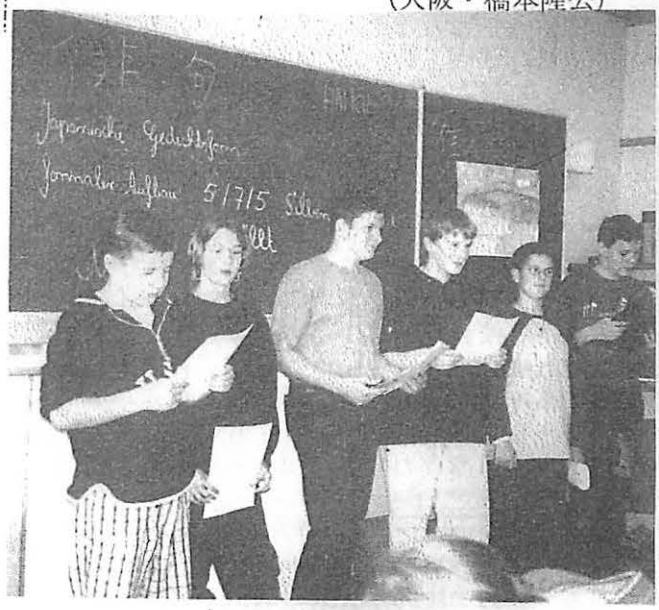
ラウンジでいきなり子どもたちのサーカスが始まった。これは、プロジェクトの一つで、サーカスを選択した子どもたちが、体をふれ合う活動を通して国際理解を図ったり、発表を通して自信をもったりできるようにプログラムされたものである。

この学校は、５～１０年生（高１）の５００人が在籍している。校舎内の壁は、子どもたちによる芸術的な作品で彩られており、教室の扉が見つけにくいほどぎっしりにデザインされていた。６年生のクラスでは、１週間の学習プログラムをドイツ語で写す授業を参観した。

これは、ロシアをはじめ２８ヶ国の子どもたちが授業を受けるため、ドイツ語の授業も兼ねている。（ＴＴによる慣れない子どもへの補助も見受けられた。７年生のクラスでは、ユーロリンク（提携しているヨーロッパの学校の子どもたちの作品集）を活用して、グループ毎に異なる作品を選んで学習をしていた。

「日本で、アジアリンクなんていかがでしょうか？」他の７年生クラスでは、俳句の学習をしていた。ドイツ語の上に１，２，３と数字を書いて、発音的に５－７－５になるように工夫をしていた。積極的に俳句や日本語を私たちに尋ねてくる。

（大阪・橋本隆公）



## テオドアハウス小学校

午前中だけの授業で理解できる子どもが、いわゆる「勉強の良くできる子」であり、その1年間でわからないところが多かった子どもは、もう1年（留年）同じことを学んでわかるようになればいい。そういった考え方が主流のお国では放課後多くの子どもが学習塾に通うというのは奇異に映るに違いない。

キールは、ハンブルグのドイツの北に位置する港町である。そこにあるテオドアハウス小学校は１７７２年創立の旧校舎からマンモス化に伴い、3年前に新しく創立された小学校である。

校舎は４クラス入るキューブ型が４つ、渡り廊下でつながっている。それぞれ1階が１・２年生で２階が３・４年生と、一人っ子が増えてきたドイツの、縦割りグループを意識した教室配置が伺える。

運動場側のベランダには強い日差しを防ぐために、校舎の外側にロールの丈夫そうなカーテンが設置されており、教室内から見た圧迫感が軽減されるような仕組みになっている。遊具はすべて木製。校舎内には１００年前の教科書や資料展が展示されている。歯磨きルームという部屋があり、週３回衛生士が来て指導している。

ともかく本物に出会うことが大切なのだろう。私が観光で出会った、ゲーテの使い込んだ机やケルンの大聖堂のような大きなインパクトを人に与えるものとはまた違った「本物」たちが、知らず知らずの内に子どもたちの中にしみ込んでいくことを、様々な余裕とともに大切にしているように思えた。　（兵庫・岩崎純子）

## フンボルト高校

フンボルト高校は日本との関わりがたいへん深く、１９００～１９０２年に東京大学で教師になり、日本の中等教育に貢献したハイネ・クネヒトが校長をしていたという。州で日本語を教える唯一の学校ということで、日本文化を伝える品々がケースに陳列されていた。

１８６１年に創立、１８７６年に移転した。外壁の色が違うのは第２次大戦に爆撃を受けたからだそうだ。１９６７年まで男子校だったが、今は日本でいえば、小学校５年生から大学１年生までが通う男女共学の進学校（ギムナジウム）ある。この学校の子どもたちの多くは大学進学者である。５年生の英語、９年生の音楽、最高学年１３年生の生物を参観した。生物の生徒は１３人。日本の半分程度の教室で１人の先生と人や動物の骨格について学習していた。骨格模型を用いてそれぞれの課題について、小グループで調べていく。

そして調べてわかったことやさらに疑問に思ったとを教師とともに生徒で解決していくという、実に日本ぽい進め方であった。しかし、日本と大きく違うところは、すべての生徒が自分の意見を挙手して発表し、討論し合うことだった。少人数というだけでなく自分の考えをしっかりもっているからこそ成り立つ授業だということだろうと思った。たった、１０歳で普通学校、職業学校、進学校と進路を決定しなければならないドイツの教育制度に、国民性と個人主義を強く感じた。

自分の能力や適性に応じた進路を決定するのはあくまで個人。個人の自由と責任を重んじて、個人を尊重して大集団を形成するという考え方は、ドイツの街を歩いていても実感できたことだった。それは、ドイツ人気質である誠実さからくるのではないかとも感じた。

（青森・石澤寿子）

## マックスタウ小中学校

三角で瓦屋根の家が連なり、中世そのままがドイツの特色であるが、この地域に入った途端に、日本のニュウタウンと同じ高層住宅が連なっていた。このマックス・タウ学校は１９７０年代に開発した地域である。この学校は１年生から４年生（小学校）、５年生生から９年生（中学校）までが一緒になっている学校である。

外国人は１５パーセントで２０カ国からの子どもが通学しドイツ語もできない子もいるが一緒に学習している。１年生の教室に３日前に入学した日本人もいた。このニュータウンの地域にはマックス・タウ学校も含めて５つの学校がある。この地域に住む４０％の住民が福祉のお世話になっている程貧しい生活をしている地域である。

学校として総合学習をする時に、年に１週間集中してやる。普段の中では、課題解決学習をしている。運動会は、ドイツから入ってきたようだが、どいつは今では運動会はやっていない。地域や市の運動会に参加している。

（東京・川島良代）

## シュタイナー学校

シュタイナー学校については、子安美知子著「ミュンヘンの小学生」で広く日本に紹介されて有名になった。最近日本でも、幼稚園にシュタイナーの教育を取り入れたり、新聞に特集を組むなどして、シュタイナー教育への関心が高まってきている。

今回訪問したキールシュタイナー学校は、テオドールハス小学校のすぐ隣に位置し、ハス小学校長の肝いりで偶然実現したものである。

本校は、１９８４年創立の学校で、知的に遅れている児童生徒１２０人が在籍している。教職員は１２名で、学校長はいない。他の学校と一見して異なるところは学校の建物である。屋根の形は音楽ホールか美術観を思わせる。また、オイリュトミューと呼ばれるリズムダンスも独特で、銅製の棒を持ち、回転や反転は我々には難しかった。

校舎内には陶芸・織物・洗濯・木工の作業場があり、労働はこの学校では大きなウェイトを占めている。中でも木工品はかなりのレベルに達しており、教師と生徒の共同作業場はとても美しく整頓されていた。

農業を重要視しているシュタイナー学校では野菜や果物など自然の恵みを受けた「食事」もとても大切な活動である。訪問時は、ちょうど昼食の時間でテーブルにはスープと果物。それにこの学校で作ったチーズが並べられていた。自分たちの食物は自分たちの手で作るという基本的なことが実践されていたことは、驚きでもあり、感動でもあった。

今回、シュタイナー学校のほんの一部分を参観したが、「エポック」や「オイリュトミュー」等、実際の授業を参観したかった。また、カリキュラムについて詳しく尋ねてみたかった。　今後、日本の教育に取り入れられたら？と思うことも有り、有意義なシュタイナー学校訪問だった。

（佐賀・松本　真）

# ドイツの学校施設と家具

ドイツの学校施設は、教室棟がゆったりと自然の中にとけ込むように配置されていた。校庭、中庭には様々な遊具が設置され、豊かな屋外環境をもっている。建物はフンボルト高校が赤煉瓦のネオゴチックだったのを除くと、ほとんどが日本では数少ない鉄骨造りである。そのような中、折りよく見ることができたシュタイナー学校は赤煉瓦壁面に天井はトラス組の大断面集大成の梁が使用され、内装は天井裏板まですべて板貼りで丁寧に仕上げされてた。

今回訪問の６校は、エントランスの壁面及びそのスペースにそれぞれ特徴のある卒業記念作品等の展示・掲示で学校の雰囲気を盛り上げ、我々を迎えてくれた。普通教室の開口部（窓枠はドリーキップ方式による換気とペアガラス採用）は天井まで高く取り、外の自然を取り込んでいた。また、教室の出入り口が一カ所というのも特徴の一つといえる。

普通教室の収納家具は、躯体への固定式でなく、両開式簡易固定黒板とスチーム設置意外はすべて置き家具で整え、教室の内装含め非常にシンプルな仕上げである。特に小学校における教室家具の特徴としては、木製のオープンな簡便な棚が窓際に設置され、常時使用する教材・教具、学習材、ファイル、テスト機器及び答え合わせ教材が整然と並べられいた。

床にラグカーペットを敷き、自分の領域を決めて座って学習する情景は、モンテッソリー教育を導入したシャリダンスクールを米国で見た雰囲気に似ている。室内には鞄収納棚が無く、日本の物より二周りも大きく、軽い素材で、派手で楽しいデザインのランドセル（１５０００円程度）が無造作に自分の机下に放り投げてある。

また、コート掛けも面白かった。教室の出入り口や廊下壁面（折畳収納式もあり）に安全に配慮された形で設置されており、寒冷地ならではの工夫が見られた。（教育環境研究所・小山敏男）

# ドイツの思い出　―ドイツ研修旅行に参加して ―

**収穫の旅**

この研修旅行での収穫の一つは全個連のメンバーの方々のおおらかさ、言い換えればアバウトさを知ったことだ。それが個性を育む教育におおいに生かされているのであろう。

１日目の夕食ための繁華街へ出かけることなり、近くを走る路面電車に乗ることになったのだが、目的地に確実に着けるのかどうかもわからないまま乗車。未知の土地ではこの電車に乗っていくつめの駅で降りれば・・と確認してから行くのが“常識”。ましてここは日本語が通じない街だ。それなのに行き先も調べず全員乗車。

この旅行のためのガイドブックを３冊読み込んだという岩崎さんと「この電車ではその駅にはたどりつけないんじゃない」と話しつつも、悲しいかな２人とも初参加の身、何も言えぬまま取り残されてはいけないと一番後ろから電車に乗り込んだ。

心配で何度も車内の線路図を見ていると背後から「May I Help you？」の声。いきなりの問いかけに、地図を指しながらしどろもどろで、「Train Change？」などと訳のわからない英語を発するとその異国人は微笑みながら別の駅を指して「Walking about １０ minutes」と中学英語で答えてくれた。これも大きな収穫となった。　（神奈川・小林哲功）

**環境への市民意識**

ドイツで１週間を過ごして目に付いたことが２つある。１つは、環境問題への市民レベルでの取り組みである。スーパーで買物をしても、日本のようにビニル袋を無料ではくれない。日本のビニル袋とは比較できないような頼りない袋を０．５マルク（約５０円）で買うか、袋を持参するかどちらかである。私が見た多くの人は、布製の袋を持参していた。もう１つは安全についてである。幼児を連れて自転車にのる場合、車に設置するようなチャイルドシートを後ろに取り付けるか、乳母車のようなカートを自転車の後方に連結させていた。車道自転車、歩道の区別もなされていた。

市民の意識に驚き、日本の生活習慣を見直すいい機会であった。　（大阪・石田純子）

**ドイツ旅行に参加して**

個性豊かな皆様とご一緒でき、とても楽しい旅をさせていただいた。フランクフルトの居酒屋でアップルワインを賑やかに飲みドイツの方々と、片言の英語で何やら訳がわかったような交流をしたこと。ビールの飲みくらべをし、ソーセージや生ハムに舌鼓をうったこと。

駅には、全く改札口というものが無いのに、ドイツ人の人々の良心を感じたこと。石造りの建物に何百年という歴史を感じると同時に、戦争の傷痕があちこちに残っていることが、人々の感情思想にどんな影響を与えているのかと思いめぐらしたこと。

教育のシステムが日本と違うことを、実際に教育現場を視察することで実感し、改めて日本の教育の長所、短所、改善点等を感じたこと。

ボンの静かな美しい街並み、ケルンの圧倒されるような大聖堂キールのＵボート、ベルリンの再開発の規模の大きさ等々。またもう一度訪ねてみたいと思う。　（兵庫・谷口奈緒美）

## ドイツのビール

ドイツは、ビールの本場だけあって、その味は格別である。

種類もたくさんあって、地方ごとに醸造されている。あまりの美味しさに、教育研修旅行を、急にビール研修旅行（？）に変えた人もいたほどある。

フランクフルトソーセージにビール！。

確かに、その味は思い出しても、美味の一言。

**「目が回った」 and 「食べた」**

高所恐怖症の私がフランクフルトのドーム（大聖堂）に登ったのが間違いのもと。３８３段の途中で足がすくんでしまい、もうこりごり。ケルンのドームの５００段は棄権し、皆が下りてくるのを待つこととなった。しかし、ベルリンの戦勝記念塔の２５８段は、最後の見学場所ということもあって、必死の思いで登ってみたが冷や汗ものであった。

何といってもハムやソーセージが美味しく、また、ビールやワインも本場の味は素晴らしいものであった。

今回は皆さんに迷惑をかけることなく、無事おえることができた。よかった。また行きたい。

（神奈川・河合多美子）

**親切でおおらかな国・・ドイツ**

広大な大地、悠々と流れるライン川、車窓から眺めた古城の数々、そして学校見学等々・・

今回も楽しく参加させていただきました。音楽の盛んなドイツに行くことを、大変楽しみにしていました。演奏会に行くことはできませんでしたが、ボン市内のベートーベンの生家やベルリンにあるフィルハーモニーの建物、楽器博物館等を見学することができました。

また、道路でガイドブックを見ていると、「どこに行くのか？」と親切に教えてくれる人がいたり、地下鉄等もほとんどフリーパスというような状態で、とてもよい印象が残りました。

今度は急行料金を払って！」と見逃してくれた列車の車掌さん、どうもありがとう。

（神奈川・河合菜保子　高校生）

**ドイツ紀行**

ドイツは本当に美しい国でした。近代的なビルと昔ながらの家々がうまく調和している街並みの光景は、今でも忘れられません。また、都市ごとに少しずつ雰囲気が違うのも魅力的でした。（例えば、近代的なフランクフルト、歴史的なベルリンなど）

一般的にドイツ人はあまり社交的ではないと言われますが、行ってみてそれが間違いであることがわかりました。店や電車の中で会う人達はみんな笑顔で「どこから来たの。」と聞いてくれ、片言の英語ながらとても話が弾みました。そして、みんなが自分の国に誇りをもっているのが感じられ、日本とは随分違うなあと思いました。

（佐賀・松本美樹　高校生）

## －おしらせ－

私共の連盟の事務局長の任を、長い間、果たしていただいておりました、高浦勝義先生が、１０月１日付で、国立教育研究所の教育指導研究部長に昇進されました。

先生は、これから、ますます多忙なお立場になられますので、このたび事務局長を退かれることになりました。

後任の事務局長は東京学芸大学助教授・浅沼茂先生に決まりましたのでお知らせします。

なお、封書等に記載にされています事務局長名は、しばらくの間、高浦先生のままですのでご了承ください。

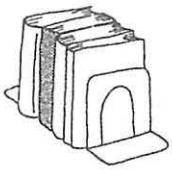
## －お詫びと訂正－

９月２６日付け会報・第４８号の巻頭言、台東区立大正小学校長・石橋久司先生の「教室の中の教育改革」にに次のような誤字がありましたのでお詫びし、訂正いたします。

論文の後半１３行目、「まず実験」を「まず実践」に訂正いたします。

記載文「まず実験」ですと、解釈に誤解を生じます。石橋先生にご迷惑をおかけしましたことを、謹んでお詫びし、訂正いたします。

# （2） アメリカ研修旅行



## *アメリカの多文化教育に学ぶ*

東京学芸大学 助教授　浅沼　茂

今回のシカゴでの研修旅行は、関東地方から６名、関西から４名、計１０名の参加者を得て、８月４日から始まった。

受け入れ先である、シカゴのグローバル教育団体である、Education for Global Involvement（グローバル教育協会）は、NGO の非営利団体で、多文化教育を中心に世界の教育団体とネットワークを結び、教員の資質の向上に向け国際的な視野の拡大をめざしている。中西部の典型的な大都市であるシカゴは、西海岸や東海岸と比べ、情報の流通から見ると日本からは遠い位置にある。

けれども、いわゆる WASP たちとはやや趣を異にするアメリカへの移民層として、農業と工業を基盤とする独特の文化的な伝統を形成してきた。

絶え間なき移民の伝統故に、この団体に参加するアメリカ人教師たちは、アメリカ化と同時に異文化への関心も強く、日本への経済的な関心だけではなく、教育や文化について謙虚に学ぼうという姿勢がうかがえる。特に、スペイン語を中心としたバイリンガル教師が多く研修に参加し、まず初めに日本への研修旅行に来ている。その際には、全個連の先生方にはホームスティを無理して引き受けていただき、国際交流の一翼を担っていただいた。

先方の計画としては、日本からも教師を呼びホームスティをさせながら教師自身の国際理解教育を、体験的に実践させるというものであった。

このような教師自身の体験的な国際理解教育は多くの海外研修旅行がお客様として学校などを「見学」しているのに比べ、教師自身の体験的な自己啓発を必要としており、私は大変興味深く参加させていただいた。

そして、研修自体は、体験学習を含む非常に濃い内容のものであった。初日は、いきなりデモンストレーション授業から始まり、大きな（失礼）靴をたくさん自宅から持ち込んできたアメリカ人の教師が、それを良い悪いという自分の基準で並べ、その基準を自分なりに発表させその自分自身の持つ基準と他の人たちとの違いに気づかせるというような内容であった。また自分の趣味や特技の違いによって、人間の特質の多様性を認め合うという授業も体験学習した。

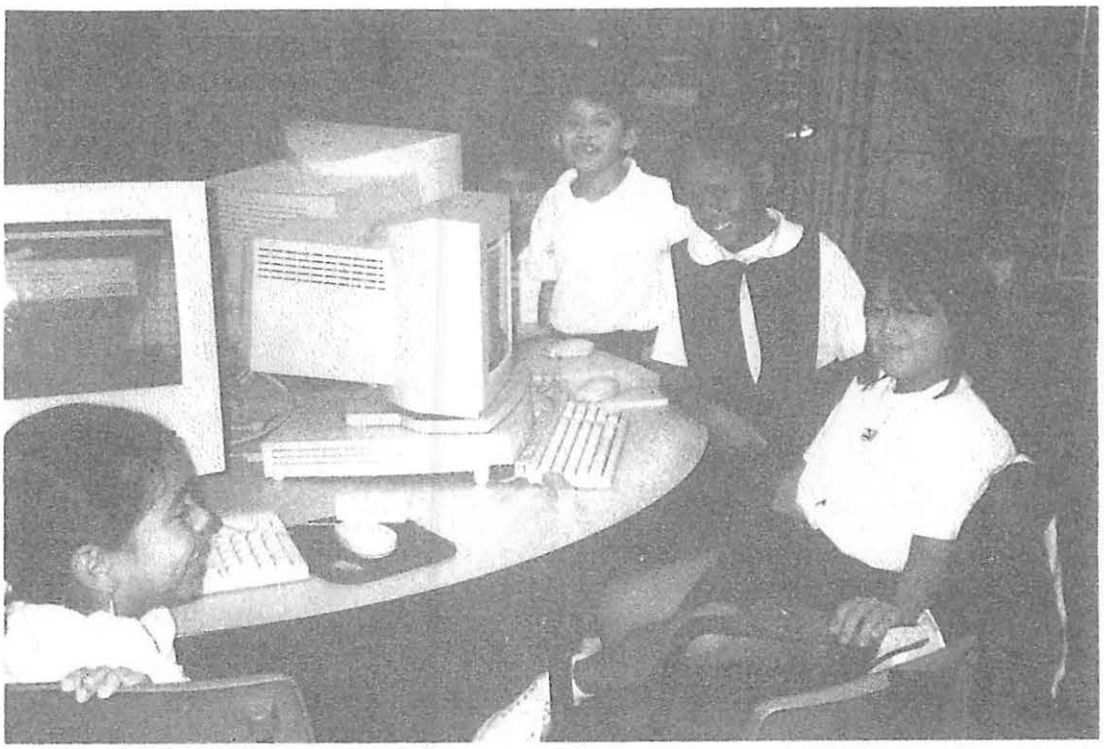
また、実際の学校訪問では、小学校２年生の子どもともにインターネットを駆使してグローバルなコミュニケーションを試みたり、小学校４年生が広島の原爆について考える授業を見たり、日本の参加者がアメリカ人の子どもたちとディスカッションしたりというような体験もした。

それから、シカゴの教育委員会でバイリンガル教育と多文化教育の担当者に話を伺い、バイリンガル教育のプログラムの年限を３年にとどめるという予定に、研修に参加しているアメリカ人教師が反発し、やり合うというような緊迫した場面も体験的に見ることができた。

私たちは、これまでアメリカの研修旅行が多く、アメリカの教育についてはやや飽きてきているような傾向がうかがえるが、移民の国アメリカの教育の動きは多文化状況を迎え、ダイナミックに動いており、そのダイナミズムをつぶさに体験できたことは非常に貴重であったと思う。

通訳としてずっと付き添っていただいたシカゴの高田のり子先生は、戦後シカゴのアメリカの小学校でずっと教鞭をとっておられた方で、高田先生の通訳のおかげでアメリカの多文化教育の現状を身近に感じながら体験できた。

また、ホームスティは、自分自身で直にアメリカ人教師と暮らしをともにするわけであり、言葉の問題を乗り越え、人間としておつきあいできたということは非常に貴重な体験学習であったと思う。



## 個性重視が世界へ

アメリカ側のつくったプログラムを見るとEducation For Global Involvement とある。テーマは「世界参加のための教育」とでもいうのだろうか。関心はあるが、深く勉強していない内容である。それに聞き取れない英語。しかし、課題を含めて多くのことを学んだ。白人３７パーセント、黒人３８パーセント、ヒスパニック１１パーセント。人種の坩堝ともいうべきシカゴでは、多文化教育は不可避なものであり、それは世界へとつながるものであった。「アメリカは民主主義社会にならざるをえないのだ」。そして、それを今西錦司のいう「棲み分け」によって実現しているようだと、シカゴの街をみながら考えた。

１カップのヨーグルトの量は日本の２倍以上。食事も家もみなこの調子。シカゴ大学やウイスコンシン大学のスケールも驚くばかり。また、広大な売場面積をもつ本屋にパラパラの客。しかもその客がソファーや床に腰を下ろして本を読み、ときにはメモをとっている。これでどうして商売が成り立つのか。日本にくらべて豊かさのケタがちがう。日本は「成り上がり者」で底が浅い。そう思いながら、しかしその向こうに見える豊かさが産む「ぜい肉」も、日本の未来と重ねて気になった。何もかもと言いたいほど、みなやたらに甘い。食べ物にたいする日本人のような「気配り」は一般にはみえない。そして、その「量」がそのままあのアメリカ人の「肥満」になっているのではないか。そう思ったとき、室町以来の日本の生活文化の厚みを意識した。

（愛知・宇田川　宏）

## 体験を通して学んだこと

今回の旅行は、10 日間にも満たない日数だったが、刺激的で貴重な体験に満ちていた。多彩としかいいようのないシカゴの教師たちと交流しモザイクのような棲み分けの町を見た。そして巨大な混沌のなかから生まれてくるアメリカ社会のエネルギーを感じた。

行く前には、なぜ多文化教育なのか、理解できないでいた。だが、移民によって成立し、今

も移民の波にもまれているアメリカでは、多文化・バイリンガル教育は焦眉の課題なのである。日本では外に、そして大方は白人の国家に向かって構えている国際理解教育が、アメリカでは国内の深刻な課題として存在する。アメリカにおいて、内なる国際化とは、決してメタファではあり得ないのである。それにしても考えさせられたことは多い。

多様な人種・文化によって構成される移民社会アメリカ。一人一人が異なることは当たり前で、違うもの同士が折り合いを付けながら生きている社会である。前へ前へと突き出るような言葉の噴出は、主張しなければ生きて行けない社会を象徴しているかのようだ。そして、この社会の根底に、「多様性は価値である」という思想を感じたりもした。また初めて訪れたアメリカは、改めて日本人としての自分を考える機会を与えてくれた。

当たり前のことだが、インターナショナルとはナショナルを忘却することではない。むしろ、ナショナルをコアとしてこそ、本物のインタナショナルに通じると実感した。

ただしその際大切なことは、ナショナルなものを価値序列的にとらえないことである。ナショナルをコアとしながら、それらを価値多元的に位置づけ、相対化することである。

考えてみれば日本は、そのような立場を半世紀前に宣言していたはずである。「普遍的にしてしかも個性豊かな文化の創造」（教育基本法前文）とは、多文化・国際理解の精神を表明していたのだと考えてよいのである。

（千葉・和井田清司）

## Cross-cultural Institute on Multicultural/Global Education for Japanese and Chicago Educatorsに参加して

今回、多文化教育の会議に出席できたことで、マイノリティの生徒達（メキシコからの移住が多い）と直接向き合っておられるシカゴの公立学校の先生方と交流できた。

統一テストの点数が他の中学校よりも低いことで私の学校はだめな中学校だとよくいわれる。「しかし、テスト問題が英語で書かれているので、生徒の半数は問題自体を理解できないのだ。」とヒスパニックの生徒が多く通うシカゴの中学校の校長先生が統一テストの批判や、その悔しさをを生徒の立場に立って訴えておられた。

ただ単に生徒を学校に受け入れるということだけではなく、教育内容や教育方法にまで関わって考えていこうと日々、がんばっておられる思いにじかに触れることができ共感した。

大阪では、近年中国やブラジルなどをはじめとする渡日生徒が増えだした。彼らの教育を受ける権利を保障していくために、いくつかの学校でカリキュラムや指導法まで踏み込んで、違いをわかりあい、認めあっていくための教育実践が行われてだしたところである。

しかし、大阪市内全体としてみると、まだまだそれらの実践は点の存在でしかない。国際理解教育・多文化理解教育・共生教育といわれるような教育は、やっとスタートしたという感じである。

高校の教師マリーン・マゴーン先生の自宅にホームステイで 9 日間お世話になった。夜遅くまで、教育の論議をしながら、互いに教師として共通した思いを持った。

今まで中島中学校で 16 年間、部落出身生徒、在日朝鮮・韓国人生徒・障害を受けている生徒たちを中心としながら、日本社会の中でのマイノリティの子ども達に関わったきた。マイノリティの子ども達の成績がなかなか伸びない理由を、落ち着きがないから・集中力がないから・家で勉強しないからなどと、表面でしか捉えきれていない場合がある。

マイノリティの子ども達に、マジョリティの文化を中心とする教育内容やカリキュラムを押し付けてしまっているのに気づかずに、その子どもや、家庭の責任にしてしまう。すべての子ども達が、集団の中で互いに個性が認められ、展望を持って意欲的に生活を送っていくことができる学校を創っていくために、マイノリティの側に立った教育改革の必要性を確認しあった。そして、シカゴと大阪で互いに教育者としてがんばっていくことを、私はマリーン先生と約束した。

（大阪・大下　雅則）

## ホワイトと呼ばれる人たち

プログラムでの講義中、講師が次のようなことを言った。「現在、シカゴではラテン系の子どもの数は多いが教師は 90 %が＜ホワイト＞だ。この中で＜ホワイト＞ ではない教師は、何名い

ますか？約20名中3名だけです。」確かにシカゴ全体をマクロの視点で見ればその通りかもしれない。しかし、この発言に私は2つの疑問をもった。

一つめは、＜ホワイト＞というくくり方に対してである。この講義の前日、私は自分のホストファミリーが教員として働いているレイチェルカーソンスクールを見学し、見かける生徒のほとんどがラテン系であることを実感したと同時に、教室の前に張って いる担任の教師の名前に驚いき、そこに一種の「多文化な雰囲気」を感じた。たとえば、私のホストを例に出すと彼女の名は「Bernertte KOPEC」といい、彼女の両親はポ ーランド人である。このように、その名前から明らかにいわゆる「アメリカ出身」ではないと思える教師の名前ばかりが、教室の前に張っている。肌の色は＜ホワイト＞でも、そこにはそれぞれに違った文化、背景、歴史を持っていることを感じさせる空間があった。＜ホワイト＞と呼ばれる教員たちのほとんどは、ポーランド系、アイルランド系、リトアニア系、ギリシャ系アメリカ人である。彼らをすて「ホワイト＝アメリカ人＝マジョリティー」という範疇に入れてしまって良いのだろうか？一時的、表面的には何も問題なく思えても、どこかに無理が生じるのではないだろうか、漠然としたそんな疑問を感じていた。

次に気になったのは、「＜ホワイト＞の教師が必要な場所もある」ことを今のシカゴの状況では十分注意しておかねばならないのでは、ということである。シカゴの何分の一かの教室では、すでに、「ラテン系の生徒」が「マイノリティー」ではなくなっているのである。

生徒の８割がラテン系子どもたちの中で、教師がラテン系アメリカ人である教室を想像して欲しい。今度は＜ホワイト＞と呼ばれる子どもたちが「マイノリティー」になるのだ。もちろん絶対数から＜ホワイト＞以外の教師が少ないのは本来あるべき姿ではないが、「教室」というのミクロの世界に注意をはらい、個別の状況に対応していく必要がある。

教室内での子どもが感じる孤立感や違うものを見た時の差別意識は、すぐに育ってしまう危険性を含んでいるのだから。　（大阪・谷　亜紀子）

## シカゴの研修を終えて

私は、シカゴの研修はお互いに共有できるいい場だったなと思った。というのは、私は先生ではないが、私たちが日頃感じていること、考えていることはシカゴの先生も基本的には同じだと思った。

例えば、この研修で鉢植えのロールプレイをした。それは、それぞれの国で育てられた鉢植えを大きい植木鉢に植えかえるというものだった。大きい植木鉢に入れるということは、アメリカ人になるということだそうだ。それは、子どもの持ってきた文化を切ってしまうということだ。そして、その切ってしまった部分を植えても花は咲かない。もしかしたら、少し根を下ろすかもしれないが、おそらく死んでしまうというもので あった。

つまり、アメリカに移民してきた子どもたちは、アメリカでアメリカ人になるようにいわれ、自分のもっていた文化を出すことができず、アメリカで暮らすことが難しくなってしまうというものであった。このようなことは、日本でもたくさん起こっている。

シカゴの先生たちは、子どもに人間としての自信を持たせること、お互いを尊敬しあえること、違うことをそのまま受けいられることなどが重要であると言われていた。これは、私も常に感じていた。ことばが話せないことで、人間としての能力が低いと思えてしまい、思われてしまう。異国に来てことばが通じないのは当然である。このようなことを考えるための様々な教材や、教え方の説明もあった。それらは、お互いのことをよく知ろうというコンセプトのものがほとんどだった。

やっぱり、お互いによく話すことから人間関係はつくられていくのだということを改めて感じさせられた。　（大阪・守屋枝美）

### 先輩方のハプニング

７０歳の宇田川先生は、多芸多才な方でアメリカ人教師に研修早々、ストレッチ体操を伝授されていた。

また、通訳のシカゴの高田先生は、東京大空襲の生き証人で、アメリカ軍の爆撃でクラスメートが何人も死んだと言う話を、見学したクラスで突然感極まって、涙を抑えきれず語り始めた。予定にないプログラムだっただが、旅を、一層趣のあるものにしてくれた。

## グローバ教育
### 多文化教育サマーセミナーに参加して

多種多様な民族にいるアメリカでは、教育を平等にするための方法を探ることが大きな課題となっています。教育における平等とは、各個人に平等に教育が行われることです。

アメリカは合法的に移民を受け入れている国なので、それぞれの母国語を持ち、英語を母国語としない子どもも多い。その子どもたちに、互いの文化の違いを認め、人間としての自信を失わせないようにすること、暴力によらず話すことによって互いを理解し合えるような力をつけさせることが必要になります。学校教育の中で、英語以外の言語を母国語とする子どもに英語を覚えさせ、教育内容を理解させ、生活できる力をつけていくことを進めていました。

チャベツ多文化アカデミー：

この学校は、１９７３年に創立、現在５５０名の児童が在籍しており、訪問した日（８月６日）は、始まったばかりでした。

この地域は、メキシコ、中南米、ポーランド等からの移民（特に低賃金労働者）が多く、学校に行けない子どもたちのために創立されたということです。子どもたちには、朝食、昼食、放課後の面倒まで学校が見てやるので、皆学校に来るそうです。

教師は６０名ほどおり、そのうち１５名は2年間平和部隊として発展途上国で働いて戻ってきたという経歴の持ち主です。その他にも、世界に目を向けた教師がたくさんいるということです。この日、参観させてもらったマイケル先生は来日した経験があり、丸木俊さんの「広島のピカ」の読み聞かせをしていました。奇しくも５３年前の今日８月６日、広島に原爆が投下された日であることに、参観者の胸に複雑な思いを新たにしました。同行の宇田川先生が内容の補足をしましたが、子どもたちはどの程度理解したでしょうか。

インターアメリカンマグネットスクールの校長の報告：

この学校は、２カ国語で教えるプログラムを持っているので、多くの国籍を持つ子供がたくさん来ているそうです。校長として、２カ国語併用はそれぞれの国の文化を尊重することで、公立学校にこのシステムを導入するのが希望でした。学校は、子どもにとって子どもの心を育む環境でなければならないと考え、環境づくりに努力してきたそうです。

たとえば、・保護者に来てもらって体験談を語ってもらう。

・家系（ルーツ）を語り、現在ある自分を考える。

・日本の教師が来たとき、教室を回って習字や折り紙を教えてもらい、日本の文化を学んだことがある。

シカゴアカデミー、パトリシア・アンダーソン校長の報告：

１９９５年の夏、７年生から１２年生の子ども１４００名全員に「広島の原爆」という本を読ませ、２５人ずつのグループで話し合わせた結果、子どもたちの心が一つになるという良い結果が出たという報告がありました。

科学者、軍人、大統領、市民、子ども、いろいろな立場で話し合わせたこと、教師も読んでともに考えを話し合う、実際の被爆者に語ってもらう、という活動を通して、学校としての一体感が生まれました。

子ども同士の連帯感が薄いので、この学習活動を進めるのに多くの努力を必要としました。また、学校が一体となって取り組むために教員の研修について努力してきたことは、

・この研修に参加すべし

・やればできるという環境づくり

・研修は継続的であるべし

・学校の中に多くの人の意見が気持ちよく述べられるムードづくりが必要

・自分の体験から、日本の生け花を学んだことから世界を見る目が変わったことがきっかけになった

全校プロジェクトに広島を選んだ理由は、「責任の問題」「世界に与えた影響の大きさ」を学んでほしかったということでした。

テストスコアが下がってきているが、この学習は一つの方向に向けて全員で取り組むことで多くのことを学んだ。この良さをきちんと身につけさせたい。また、卒業した子どもに学校に来てもらって在校生に話してもらったり、小学校の上級生が高校へ行って勉強を見てもらったりして、一対一の人間関係を作っていきたいと考えているそうです。

実際に授業参観をしてみたいところです。

（東京・ 小林　和子）

## 体験学習としてのホームステイ

今回のシカゴ訪問は、本当に毎日が刺激にあふれるものとなりました。特に１日目、「体験的に学習することの重要性」についての具体的な説明には、とても納得できるものがありました。「教える」ということに対しての日米の基本的な姿勢の違いを見たような思いでした。

日本では、おそらく抽象的で難しい言葉を並べて（それが時として、話し手や書き手の自慢だったりする）説明しようとするのに対して、いかに具体的に（出来る限りわかり易く）「何故そうなのか？」基本的な概念を説明しようとするやり方こそが、本当は重要なのだと実感することが出来ました。

基本的な発想や概念について、「わかりきったことだ！」と軽く扱うことなく理解していこうとする姿勢があって初めて、豊かな発想や創造が生まれてくるのだろうと思った次第です。

また、他文化を理解するためには「実際にその場に行って体験すること」が最善の方法であるということについても非常に納得するものがありました。事実だけを、単なる知識として頭に入れるのではなく、体験を通じてこそ本当の意味で理解できるのだという考え方は、実際に自分が、学校の中で取り組んでいるグループワークやエンカウンターグループの手法にも通じる点として共感していました。

２日目の Chaves Malticultual Academy 訪問と、午後のシカゴ教育局の office 訪問の中での話からイメージしていたのは、アメリカでの黒人差別（そこからの公民権運動）と日本での被差別部落（そこからの解放運動）を、対応させた図式でした。そして、それぞれの運動の延長線上にアメリカでは、NEW COMER に対する BILINGUAL EDUCATION の必要性が叫ばれるようになり、日本では在日外国人や日系外国人の問題に目を向けてこざるを得なかったのだろうという流れを勝手に思い描いていました。

現在、自分の勤務する中学校には、２名のブラジル人生徒が在籍しています。日本語が、ほとんど理解できない状態で転入してきた生徒を前にして、学校現場にいる者として、どのような援助が出来るのかを考えたときに、精神的な安定を含めてポルトガル語の出来る人物が必要であるとした発想は（ポルトガル語の通訳をさがす過程で多文化共生センターとつながったのですが・・）間違ってはなかったという気持ちを、今回のシカゴ訪問を通して確認することが出来ました。

カリキュラムや通訳の都合などで、必ずしもうまく行っていない面もありますが、彼らの国の言葉や文化を大切にしながら、その育ちを援助するという進め方を今後も大切にしていきたいと考えています。

（京都・岸本 良彦）

## 有意義だったアメリカ研修

私は教育学を専攻しているわけではなく、また引率してくださった浅沼先生の教え子でもありませんでした。そんな私が、なぜこのツアーに参加したかといえば、今年６月に母校で教育実習を行ったことがきっかけでした。

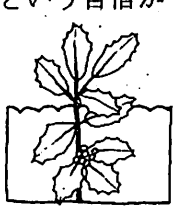
私は就職も決まっていて、卒業を前にして海外旅行をしたいと思っていた矢先、高校時代に政治経済を担当していらっしゃった和井田先生が、私にこのツアーの存在を教えてくださり、「単なる観光旅行にいくよりもおもしろそう」という気持ちでこのツアーに参加したのです。もちろん浅沼先生とも面識はありません。

そんな私が米国の教育についてもっていたイメージは、とてもお粗末でした。貧富の差が激しいのだろう、教育現場には暴力に満たされている、といったマイナスイメージが先行していました。そういったイメージは、日本で報道される米国像そのままといってよいと思います。

しかし、実際の米国の教員と話したり、授業の現場に立ち会ってみると、そのイメージは覆されてしまいました。米国が抱えるさまざまな教育現場の問題が、実は社会構造や人種問題を克服しようとして起こっているという側面です。特に人種の問題は複雑で、絶え間なく流れ込む移民には当然子どもも含まれており、教育現場に彼らを迎え入れ奮闘する教師たちがいました私たち日本人には想像を絶するエネルギーが教育現場の問題に向けらているのを見ることができました。

このツアーは、現場を見ないで物事を語ることの危険を教えてくれたように思います。それぞれの国・地域、学校は独自の歴史を背負っていて、その現場で奮闘する人たちがいるということを知らなくてはならないと思いました。現在の日本の教育問題も行政上の施策のみならず、かげで、将来ちょっと子どもの教育に関しての関心のある父親になれる、という自信がつきました。

（千葉・鯨岡　仁・大学生）



### 日米多文化国　際教育研修会概要（1998.8.4 ～ 8.11）

| | |
|---|---|
| 8/5<br>水 | ・オリエンテーション（ｼｬﾙﾛｯﾃ・ｱﾝﾀﾞｰｿﾝ：EGI 議長）<br>・学習方法についての演習（ﾀﾞｲｱﾝ・ﾃﾞｯｶｰﾄ：大学教員<br>・多文化教育の講演（ｼﾞｬﾈｯﾄ・ﾛｰﾗﾝ：シカゴ教育局） |
| 8/6<br>木 | 午前中：ﾁｬﾍﾞｽ多文化学校（公立）の参観<br>・学校紹介（ｻﾝﾄﾞﾗ・ﾄﾗﾊﾞｯｸ：校長）<br>・コンピューター演習（ﾀﾞﾆｴﾙ・ｶｰﾏｰ：同校教諭）<br>・「言語表現」の授業参観（ﾏｲｹﾙ・ﾎﾞﾌﾅｰ：同校教諭）<br>午後：シカゴ教育局訪問 |
| 8/7<br>金 | メキシカンアメリカンコミュニティ見学<br>・ビールセンコミュニティリーダーとの懇談<br>（ｶﾙﾒﾝ・ﾊﾞﾗｽｶｽ：ｱﾘﾋﾞｵ健康センター所長）<br>・メキシカン美術館・博物館訪問 |
| 8/8<br>土 | シカゴ市内見学⇒マディソンへ移動<br>・デューイスクール<br>・シカゴ大学 |
| 8/9<br>日 | マディソン<br>・J.A.Beane 宅訪問、懇談<br>・M.W.Apple 宅訪問、懇談 |
| 8<br>/10<br>月 | シカゴ歴史博物館<br>・モデル授業（ﾏﾘｱ・ｴﾚﾅ、ｼﾝﾃﾞｨ・ｾﾞｯｶｰ：教諭）<br>・博物館見学<br>・日米協会訪問<br>・概要説明（ﾘﾁｬｰﾄﾞ・ｿｰﾀｰ：所長）<br>・在日外国人の教育実践（大下雅則：大阪市教育センター）<br>・シカゴ移民社会の概観<br>（ﾛﾊﾞｰﾄ・ﾊﾞﾗﾙ：ラテン社会研究所研究員） |
| 8<br>/11<br>火 | ・小学校の多文化教育（ｴｳﾞｨ・ﾍｰﾘﾝｸﾞ：小学校長）<br>・高校での多文化教育（ﾊﾟﾄﾘｼｱ・ｱﾝﾀﾞｰｿﾝ：高校長）<br>・日本の高校の実践とディベートにみる日米関係史（和井田）<br>・日本教育事情と教育実践（浅沼茂：東京学芸大学助教授）<br>・授業実践交流（小中グループ／高校グループ）<br>・まとめ |